

編集後記

編集長(ダン シロウ)

連載執筆者の何人もの方から、「三ヶ月に一度くらいならと思っていましたが、あっという間に締め切りが来ますネ」の声が届く。編集人の立場から言うと、締め切りが済んだら直ぐ、次号の準備にかかるのは週刊誌も月刊誌も季刊誌も、基本的には同じだと思うので、そうしていただけたらと思う。仕事は一つ片付けたら、次の仕事が現れるだけなのだから。

Web マガジンを長々と発行し続けているが、15年前の創刊当時と今では、世の中はずいぶん変化している。出版業界周辺でも、この間に休刊になった雑誌、閉店になった書店は驚くほど多い。

どんどん変化する(廃れる)モノと、変わらずあり続けるモノ、この両者で世界は成り立っている。そしてあり続けるモノは変化しないのではなく、持続するための「仕組みと変化」が上手に組み込まれている。それが発行継続の知恵である。

そこを見つけたす力、理解する能力がないと、何事も結果は成り行き、運でしかないことになる。絶対に継続が正しいなどとも言えないが、次々泡のように消えるモノが良いとは言えない。マガジンの読者にも、たまにはそのあたりのことに思いを巡らしてもらえればと願う。

編集員(チバ アキオ)

対人援助学会京都大会では、梁陽日さん、大谷多加志さん、坂口伊都さんと一緒に大会事務局として、準備を進めています。いつも皆さんには感謝です。月に1回のオンライン会議を春から始め、他にもメッセージツールで連絡を取りながら進めています。最初はライングループを使っていたのですがラインで時々ある謎症状、これまでのやり取りが消えるということが起こりました。これは焦りました。ということで過去の履歴が消えたことがないメッセンジャーにチェンジ。前回の広島大会事務局の時はこちらを使っていて、いまでも振り返ってみることができるので助かっています。

この58号の編集会議の前には、ポスターセッションと団士郎先生の漫画展の掲示について、予約している教室を大谷さんと下見。大谷さんはメジャーをさりげなく持参。「木陰の物語」は最大10作品ぐらい展示できそうと目途も立ちました。1日目終わった後の情報交流会の会場も下見。京都ならではのおいしい秋の食材を使ったメニューも当日は用意して、皆さんを迎えられるよう、打ち合わせ済み。その「ごはん日和」さん(京都のお弁当とお惣菜 ごはん日和(gohanbiyori.com))は体に優しい、季節に合わせた旬の食材を使っておられます。私もいつもおいしくいただいています。ということで、参加人数に合わせて、会場をどう使うかも思案。

会場の京都光華女子大学は、京都駅から地下鉄で「四条駅」にいき、阪急京都線に乗り換え、「烏丸駅」から「西京極駅」で来ることができます。阪急電車は阪神タイガースも系列ですし、阪急ブランドは関西私鉄の中でもとても評価が高い電鉄です。車体の阪急マルーンと呼ばれる独自の配色、緑のモケット生地の椅子、木目調の車内は一目で阪急とわかる特徴です。また、京都市バスで京都駅からも乗り換えなく来ることができます。大阪国際空港(伊丹空港)からも大阪モノレール「大阪空港駅」から「南茨木駅」、そこからは阪急電車京都線で京都光華女子大学最寄りの「西京極駅」まで来ることができます。お会いできることを楽しみにしています。

夏休みに編集長の「家族理解ワークショップ」に行きました。会場は東京の戸越。知っているのは「戸越銀座」という言葉のみ。行くなら、ひとり街ブラ。戸越銀座も歩いて、魅力があるのも納得。カフェでも仕事。カフェの客層も地元京都とは違って、こぼれ聞こえる話も、話し方も新鮮。歩いて暑すぎるので銭湯を検索すると営業しているところ発見。電気風呂が腰痛にきくので、京都で銭湯巡りは時々していて、こないだは姫路でも。銭湯は下町にあることも多くて、暮らしぶりも感じられてリフレッシュ。

やっていることはいつもと同じでも場を変えたり、背景が変わったりするだけでも気分は違うし、何かしら新たに感じることも多い。皆さんも、京都大会にきて、いつもと違う特別な時間を過ごし、新たな発見を楽しんでください。

編集員(オオタニ タカシ)

8月に久しぶりに仕事以外で東京に出かけました。息子の夏休み中の予定に付き添いで行った形だったのですが、日中は別行動の時間もあったので、本当に珍しく東京でフリーに使える時間があるという機会になりました。国立美術館や岡本太郎記念館などを巡りましたが、美術館やさまざまな展示会の企画の数が関西とは圧倒的に違うことや、街中を歩いても若者の姿がとて多いことに気づきました。京都市内では、日中に街中を歩くと高齢者の方が圧倒的多数で、現役世代の40代がウロウロしていると何となく目立つ気さえしていたのですが、東京では逆に高齢者の姿をあまり見かけません。おそらく東京の姿はこの10年でそんなに様変わりはしていないのでしょうが、その時々で自分が受け取れる情報や得られる気づきが違います。タイミングによって人が受け取れるものが違うのは当然だと考えると、様々な現場の今や知見がマガジンという形でアーカイブされることの意義が改めて感じられます。

2年位前に、大阪府私立幼稚園連盟のお仕事で、子どもの発達についてオンデマンドの研修動画を作らせてもらったのですが、昨年それが連盟の全国の組織でも使われることになり、巡り巡って、マガジン執筆者である鶴谷さんがおられる原町幼稚園の先生方に見て頂く機会があったとお聞きしました。巡り合わせの面白さを感じるとともに、自分の仕事をいつ、だれがどんな形で見ることになるかわからないから、やっぱり気の抜けた仕事はできないなと思わされる出来事でした。

対人援助学マガジン

通巻58号

第15巻 第2号

2024年09月15日発行

<http://humanservices.jp/>

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第59号は2024年12月15日

発刊の予定です。

原稿締切2024年11月25日！

執筆希望者、常に募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。執筆資格は学会員であること。現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

40年以上も前のことだ。「公園の生き字引」と題したB全版パネル作品を「ぼむ」展のために描いた。有吉佐和子著『恍惚の人』がベストセラーになった後だった。

年寄りが知恵袋と言われていた時代はスマホにとって代われ、物知りだと自認していた高齢者も物忘れのボンコツと化した。だが手作業のような生活技術の実感 SNS ではなく伝わらないから、健在なものも少ない気がする。

高齢者通所施設利用者ですっかりぼけている理容師をしていた女性がいた。しかし昔取った杵柄、ハサミを持って利用者の散髪をしてあげる機会にはスクッと立ち姿まで違うのだと聞いたことがある。

三十代の後半頃に自分が老人になることなど想像もせずに描いたこのコマ漫画を、77歳になって今、あらためて見る。

それは通りすがりに目にする風景を描いていた所から、描かれている一人としてベンチに座ったの側から視線への転換のような心地のするモノだった。

2024/9/15